

---

# 僕の私の異世界邂逅記

Naru

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の私の異世界邂逅記

### 【Nコード】

N9948I

### 【作者名】

Naru

### 【あらすじ】

腐れ縁の親友が失踪してから二年の月日が立ったある日。俺たちは偶然、異世界への扉を見つけてしまった。異世界に導かれたのはなぜ俺たちのなのか。ある人物との邂逅で、それは徐々に明らかになっていく。

この作品は物語性の強い小説です

## プロローグ

さて、突然だが、こんな話をさせてもらおう。

アニメやらマンガやら、ドラマでも映画でもいい。フィクションと呼ばれているモノには、現実ではあり得ない実にファンタジーな世界観が広がっている。

そう、あり得ないのだ。それは現実ではなく人間が想像して作り上げた完全空想妄想物語という虚構なのだ。

それは至極当然なことであり、自然の摂理だ。超自然現象が存在するのならば今ごろ自然界の法則が混乱の極みに達しているだろう。しかし、それは前述の通りフィクションという作り話なのだ。何度も言うが、あり得ないことだ。

たしかに、あり得てくれたら喜ばしいことだがな。手から火やら水を出せたり、羽もないのに空を飛べたり、剣やら鎧やらを装備して巨大で奇形な生き物と対峙したりと、RPGゲームさながらの体験を試みたいと誰もが思い、想像するだろう。まあ、そんな妄想も三年間の中学校生活を無事終えるころには一緒に卒業している。未確認動物、通称UMAユーマと呼ばれる生き物がまだこの世界に存在するだろうが、たとえ新たに発見された生物が巨大かつ奇抜で火を吐く化け物だとしても、剣と鎧を着こなして見事に討伐するなんて仕事は今のところ存在しない。そもそも魔法すらないのだから、鎧なんてものを着ていたら動くことすらままならないだろう。

……まあ、その、なんだ。つまりなにが言いたいのかというとな。

元々、魔法やらなにやらのファンタジーチックなものが存在しないこの世界では、上記のことはあり得ないと言うことだ。

じゃあ、元々存在している世界だったら？

俺にとつたら「嘘だ」と吐き捨てたくなるような世界観だが、元々存在しているのだつたら『そういう世界』の人たちにとつたらそれが当たり前で、逆に俺たちの世界のほうに「嘘だ」と言いたくなるだろう。

ふむ、今のような物言いだと、もう一つ世界が存在していると言っているように聞こえるかもしれない。そう聞こえるように言ったんだからな。要するに異世界ってやつだ。まあ、異世界の存在自体がファンタジックで現実からかけ離れたものだが……、そうは言われてられないのである。

相変わらず、俺たちの住むこの世界は平凡で凡庸で平穏で、判で押したような退屈なところだ。すべてを滅ぼす凶悪なドラゴンも、箒を持った魔法使いも剣を持った勇者も現れない。むしろ現れたら精神病院を紹介されかねない、そんな世界だ。

だが、それらを兼ね揃えた世界に行くための「鍵」を、俺たちは見つけてしまったのだ。

いや、見つけることを運命づけられていた、と言ったほうがいいだろうか。

とにかく、その日から俺の日常が砕け散ってしまったのだ。

それが「見事に」なのか「無残に」なのかは、このときの俺には、まだそれを判断する余地はなかった。

## ブログ（後書き）

最初はシリアス部分が多めですが、後々コメディーを織り交ぜていこうと思っています。

更新は不定期ですが楽しんで頂ければ幸いです。はい。

二年にも及ぶ凡庸な高校生活に終止符が打たれた。

別に中退したという意味ではない。「凡庸」という言葉に注目してほしい。

俺の凡庸な生活が凡庸でなくなったということだ。

宝くじが当たって富豪になったわけでもないし、俺の腐った脳みそが著しい進化を遂げて天才的頭脳に開化したわけでもない。そもそも、俺の両親からそんな輝かしい子孫が生まれるわけがない。

三年に進級してまもなく、俺と友人の樋野壽幸ひのしゆまきが『あるもの』を見つけたのだ。

そう、それはもう今から一ヶ月程まえのことだ。

「昭人あきひとおー。これなんだと思う？」

馴染みのない新しい教室で、これまた馴染みの薄いクラスメイトの顔をぼんやりと見渡していると、

樋野壽幸が『あるもの』を見せびらかしてきたのだ。

指で摘んでいるそれは、なにかの鍵のようだった。十センチほど細い棒の先端が凸だけで、昔の西洋方面の屋敷に使われていたような単調なものだ。

俺は手にとつて確認する。

そのわりには汚れや傷もなく、新品同様の金色の輝く綺麗な鍵だった。

「どう考えても鍵としか思えんが。どうしたんだ、それ」

「拾った」と壽幸は壊れたおもちゃを拾ってきた幼稚園児のような顔で言った。

それを俺は鼻で笑って一蹴。

「もう俺らはバイクに乗れるような歳だぞ。子供みたいなことすんな」

あと少し経てば車にも乗れる。

訝しそうな顔で「でもよー」とぼやく壽幸。

「すげー綺麗だろ。アンティークものとして高く売れねえかな」

そもそもアンティークものがそんな綺麗なはずがない。こいつ、アンティークの意味を知っているのか？

「売れるわけないだろ。捨てて来い」

そんな会話で、壽幸の鍵を拾ってきた話は終わった。いや、俺が終わらせた。

ブツブツと文句を言っていた壽幸は、鍵をゴミ箱ではなく制服のポケットに滑らせ、自分の席へと戻っていった。

昼休みになると、弁当持参で俺と壽幸で屋上への階段を上っていた。

とはいっても、うちの高校では屋上に出るための戸は施錠されており、出ることにはできないのだが。そのため、屋上へ出る一歩手前の踊り場で昼食を摂ることが日課だった。行動を共にすることの多い、鵜瀬颯人うせはてひとやら詩丘琴音しおかことねという腐れ縁とも呼べる親しい友人は、そのときばかりは別行動をとっていた。

三年の教室は一階で、この前まで三階の教室で過ごしてきたためか、屋上へ赴くのに多少々ダルさを感じる。

「それにしても、また昭人と同じクラスでよかったぜえ」

現在のクラスについて語りながら、俺たちは一段一段と足を運ぶ。ちなみに、昭人というのは俺の名前だ。

本名は須波昭人<sup>すなみあきひと</sup>で、別に気に入ってるわけでも、不満があるわけでもない。

余談は別として、五階に到着。あと一階で屋上だ。

「わりい、ちよいとトイレ行っちゃよくる。さきに行ってくれ」

弁当を俺に手渡し、壽幸はそのままトイレに向かっていた。

言われたとおりに、俺はそのまま階段を上がる。

もうそろそろ、殺風景で汚い屋上が見える。

腰を曲げながら「疲れた」と爺さんのような素振りをして、やっと到着

「んあ？」

マンガのように口を開いて、俺は間抜けな声を上げた。

いつもなら、目の前に無色透明な戸があるはずだが……。

そこにあるのは、木でできた大きな扉だった。天井ギリギリまでの高さがある扉は、静かに開かれるのを待っているようだった。

西洋の屋敷にありそうな実に立派な ……ん？

なぜだろうか。この扉から壽幸の拾ってきた鍵が連想できてしま

ふと、俺は視線をわずかに落とす。金色のドアノブの下には、小さな穴が開いていた。やはりと言っべきか……。

「んが！ なんだこりゃ！」

背後から壽幸の叫び声が聞こえてきた。  
どうやらこの扉は幻覚ではないらしい。

「……ビフォーアフター？」

馬鹿なことを言っている壽幸へと振り返ると、俺は手を差し出した。  
た。

「鍵はまだ持っているか？」

「……は？」

一瞬反応に遅れて、壽幸は思い出したようにポケットに手を突っ込んだ。

「おいおい、これはまさかの展開かぁー？」

楽しそうに顔を綻ばせながら、壽幸は俺の手の上に鍵を乗せた。  
なぜだか知らんが俺も興奮と好奇心が抑えられないでいる。多分、  
気持ち悪いぐらいにニヤついているだろう。  
まさかな、と思いつつも、鍵穴と思しき穴に鍵をゆっくりと挿す。  
そして

ガチャ。

そんな音が、俺の鼓膜を刺激した。

「どうやら、まさかの展開らしいな」

鍵を壽幸へと放り投げ、親指を立てる。

「やべえ、ワクワクしてきたわ！」

プリンを眼前にした三歳児のような笑顔で、壽幸は俺の隣へと駆け出してきた。

「よし、開けるぞ」

この扉がなんなのかは知る由もないがどうでもいい。だが今、屋上へと続く扉が開かれ。

「えっ」「んな」

なかった。

俺と壽幸は茫然自失に同時に声を上げる。いや、扉自体は開いたのだが……。

目の前に広がる光景が、殺風景で汚い屋上ではなく、緑一色の森の中だった。

「あー……どうしよう」

壽幸は頭を掻きながら言った。

「まさか、この扉は未来の猫型ロボットが持ってきたピンクのドアじゃ」

「少し黙っててくれ」

「わるい。ピンクじゃねえもんな」

ポケなのか真面目なのかは分からない壽幸の言葉を遮りつつ、俺は目覚めてきた頭で思案する。

ここが屋上？ いや、そんなわけがない。じゃあ、後ろに鎮座する扉が本当にどこにでも行ける扉なのか？ いや、それも違う。そもそも俺はこんな森の中に赴きたいとは微塵も思っっちゃいなかった。

じゃあ、ここはどこなんだ？

不意に、開け放たれたままの扉が勝手に閉まった。そして鍵のかる音がする。

「……戻れないとか、ないよな」

唾を飲みながら、恐る恐る壽幸に訊いた。それは「ちゃんと鍵を持つてるよな？」という意味を含めての言葉だ。

「いや、大丈夫だ」

壽幸はポケットから鍵を取り出した。ひとまず安心だな。

「とりあえず、帰らん？」

「激しく同意する」

なんかよく分からんし気味が悪いからな。状況の判断がうまくできない。まあ、夢というチープなオチだろうが。

扉のほうへ振り返り、壽幸は鍵を鍵穴に挿し込もうとする、と。

背後からガサガサと草木を揺らす音が聞こえてきた。それから豚のような濁った鳴き声と荒い鼻息が俺たちの動きを硬直させる。

なんだ、今のは。

俺は壽幸と顔を見合わせてから、激しく脈を打つ心音を感じながらゆっくりと振り返った。

「……あー、なんてかわいいワんちゃんなんだ。あはは……」

「おい、全く笑えんぞ」

目の前の生き物を刺激しないように声を潜めて言う。しかし、もう手遅れな気がする。

フゴ、と荒々しく鼻をならし、突進する気が満ち溢れている闘牛のような構えをとっている猪を発見した。余りあるぐらい興奮しているようだ。あはは、なんてかわいらし……やっぱり笑えん。

大きさが闘牛の三倍以上あるんだ。笑って過ごせるわけがないだろ。

しかしまあ、鋭利で武骨で巨大な牙がなんとも素敵だ。きっとこいつのチャームポイントなのだろう。俺たちの串刺し即死というフラグを立ててくるあたりがなんとも言えない。

「……死んだな」

垂涎する巨大猪を目視しながら、俺は涎ではなく冷や汗を垂らすのだった。

さあ、どうしたものかね。

俺は固唾を飲んで巨大猪を見つめる。

ゴクリ、と隣からも喉をならす音がはっきりと聞こえてきた。

本能で「逃げろ」と脳みそが警鐘を鳴らしまくるが、いかんせん足が動かない。くそ、情けねえな、俺。

「……に、逃げねえのか」

すぐ隣で、北極に裸でいる人が発するような声が聞こえた。もっとも、声の震えは寒さじゃなく恐怖からきているものだろうが。

「逃げられるのなら、逃げてくれ」

こうして俺と壽幸が揃って突っ立っていたら、二人共々天に召されることになる。

ならばどちらかが巨大猪の注意を引きながら逃走すれば、二人とも助かるかもしれない。

「なんだ。足が動かないのか？」

「余計なお世話だ。いいから早くその場から離れて、あいつの注意を喚起してくれ」

血走った眼球でこちらを睨み付ける巨大猪は、耳がつんざくほどの鳴き声を上げた。向こうはやる気満々のようだ。

「よし、いくぞ。さん、いち……」

壽幸は静かに逃走への秒読みをする。土壇場で足が動かないとか言うなよ？

「……ぜろ！ カモン猪い！」

怒鳴り声にも近い罵声を発しながら、俺たちと猪の垂直線上に壽幸は全速力で駆け出した。それと同時に猪は突進をしてきたが、すぐに方向を変え、標的を壽幸に絞った。

うまく走り回ってくれよ壽幸。

一旦去った死の危険に体が安堵したのか、足が動くようになった。今度は俺がどうにかして猪を引き付け、壽幸に扉を開けさせなくてはな。俺は何か投擲できるものがないか辺りを見渡す。

「っで！」

走り出して早々、壽幸が盛大に地面に転倒した。

「なにしてんだよ！」

「知らねえよ！ 体がおかしいくらい」

「いいから早く起き上がれ！」

思わず俺は壽幸の元へと走り出そうとして こけた。

なんだこれ？ 体が、軽い？

走ろうと地面を蹴ったら跳躍に近い体制となってしまうたのだ。動作に頭が追いつかずに反応しきれなかった。

「はっ！」

瞬間的な思考を放棄し、打つ伏したまま壽幸のほうへ顔を向ける。

「くっ！」

巨大猪の俊足ともいえる速さの前ではもう遅かった。

壽幸が立ち上がるころには驀進する猪との距離は僅か。逃げることはもう不可能だった。

「壽幸！」

俺は衝動的に叫ぶ。救う余地はない。終わった。助走に乗った猪は、躊躇もなく壽幸と激突した。

「がっ　！」

猪もどきは掬い上げるように顎を上方へと上げ、壽幸は十メートルほど後方へと飛ばされる。

あの図体である速さだ。致命傷は避けられない。無念。

だが、壽幸は空中に飛ばされたままあっけらかんとした顔で、余裕にも首を傾げていた。そして落下ではなく、華麗に着地した。

「……あれ？　大して痛くないぞ」

んな馬鹿なことあるか。そう言ってやりたかったが、壽幸の表情は呆気にとられたような顔で、決して痛みを苦渋するものではなかった。

「そんでもって、体が羽みてえに軽い！」

嬉しそうにその場で飛び跳ねる壽幸。最低でも二メートル以上高く跳んでいるように感じるのは錯覚ではないはずだ。

「フゴッ！」

嬉々する壽幸を他所に、猪は混濁した息を漏らしながらまたしても突進を開始する。

「はっ！ 単純なやつだな！」

明らかに調子に乗っている壽幸は、逃げようとせずにもその場で突っ立っている。痛みがなかったためか、余裕を見せている。

俺は倒れた体を起き上がりながら傍観する。

猪は無骨な牙を武器に壽幸との距離を縮め衝突………することはなかった。

「いやっほう！」

先ほどよりも数倍高い飛躍で突進を回避し、猪の後ろをとる。

それから急停止をかけた猪の背中目掛けて助走をつけた跳び蹴りをかます。

そしてその場で壽幸が倒れこむと、脚を抱えて一言、

「いってええええええ！」

はね飛ばされるよりもこっちのほうに痛かったらしい。ふむ、壽幸らしい哀れな光景だ。

しかしまあ、こんな滑稽なものを見せられると、猪に懐いてる自分が馬鹿らしく思えてきた。

いつのまにか俺からは恐怖心は取り除かれ、代わり猪をなんとか

しなくてはならないのか、という倦怠感が取り巻いた。

「おっと、やべ」

振り返ってきた猪に声を上げながらその場から離れる。

「おい昭人！」

猪との鬼ごっこを繰り広げ始めた壽幸は、走りながら俺を呼んだ。ちなみに壽幸の走力はというと金メダル級のそれをいつていた。

「なんだ」

半ば呆れを交えた声色を壽幸にぶつける。

「帰るのはあとだ！　まずはムカつくこいつをぶっ倒す！」

猪を指差しながら壽幸は目を吊り上げる。

はあ、と俺はため息を漏らす。案の定といつかなんといつか……。昔から喧嘩っ早いもんな、お前は。

脚を痛めたのは自業自得だろう、とは言わずに、俺は口を閉ざしたまま頷く。勝手にしろ。

しかし頭の悪い壽幸のことだ。「ぶっ倒す！」なんてほざいといて、倒す方法は考え付いていないだろう。見るからに硬そうな毛皮相手に、先ほどのように打撃で争おうとしてはジリ貧だ。

さあ、どうしたものかね。なにか武器になるものがあればいいのだが……。

なんとなく辺りを見渡してみる、が、そんなことをする必要はなかった。

ここは森のなかだ。武器ならそこらじゅうに転がっている。

俺は手ごころな木の棒を拾い上げる。太さ、長さともに申し分なし。

「おい、壽幸」

投げ渡してやるかと俺は足音のするほうへ振り返る。て、おい。

「馬鹿野郎！ こっちくんな！」

猪を引き連れてこっちへ向かってくる壽幸に怒号を浴びせる。

反射的に俺も走り出す。想像以上に速く動く足にもんどり打ちそ  
うになりながら。

壽幸と併走するように速さをなんとか調節し、先ほどの木の棒を  
手渡す。

壽幸は怪訝な顔をして息を吐いた。

「馬鹿はそつちだろ？ こんなんでどう戦えつつうんだよ」

たしかに、あやつ頑丈な皮膚に叩き込んでも折れるのがオチだ。  
だが、

「目玉にでも刺せばいい。いくらなんでも眼球は人間並みだろ」

それを聞いた壽幸の表情は苦渋なものへと変化する。

「正気か、お前」

「俺はいつでも正気だ。ようは部位の軟らかい所へ刺せばいい」

どうせやるのは壽幸だ。

その後の光景は容易く想像できるが、いまはそのことを放棄する。

現実逃避ってやつだ。

俺は壽幸の肩を軽く叩くと、猪の突進線上から離脱する。

「簡単に言ってくれるじゃねえか」

逃走を中断して急停止。後ろに振り返ると壽幸は跳びあがった。またしても猪の背後へ着地しそのまま突っ込む。

「ようは刺せばいいんだろ」

顔に似合わずグロテスクなものが苦手な壽幸のことだ。眼は狙わないと分かっていたが、どこを狙っているのだろうか。

「多分こいつの弱点はここだ！」

木の棒を両手で構え、一気に目を光らせた。そして、

「いくぞ！ 千・年・殺しいい！」

さすが馬鹿だ。

かつて見たことのないような凄まじい浣腸を猪の尻へとかました。あんなもん喰らったら一生便秘知らずでいられるな。血便が止まらなくなりそうだが。

パキン。

しかしまあ、巨大猪の尻の穴はとてつもなく頑丈なようだった。壽幸よ、その攻撃は冗談だろ？ 本気で浣腸で倒そうなんて思っただけなかつたよな？

無残に折れた木の枝を眺めつつ、壽幸は仰天しているようだった。

「お、俺の浣腸が……きかないだと？」

別に俺はいま、笑いは欲してないのだが。

目を真ん丸にしている壽幸に対して、肩を竦められずにはいられなかった。

こいつはどこにいてもこの調子か。こんな奇怪であかしの場所で巨大な怪物に襲われている真つ最中という割と深刻な状況なのに、滑稽な状況に成り代わる。

まあ、壽幸はいたって真面目だろうが。

巨大な猪もどきを目の前にして心を和ませるとは実におかしな話だが、実際、猪が脅威に思えないのも事実だ。なぜか俺たちの身体能力が神羅っているからな。

だが、そんな都合のいい夢も飽きてきた。弁当も食ってないしさ。

「なあ壽幸。そろそろ本気で帰りたいんだが」

性懲りもなく逃走を再開した壽幸に話しかける。

猪の猛進は威力はあるものの単調で避けやすい。会話しながらでも十分鬼ごっこを楽しめる。

「だったら手伝えつつの」

走り回りながらもまだ所持している木の棒は、折れた部分が逆に鋭利になっており、突くには格好の獲物と遂げていた。

俺も転がっている木の棒を適当に拾い上げ、応戦を試みる。

実際に戦うとなると、また恐怖心がこみ上げてこないわけでもない。

しかしまあ、空手部の詩丘琴音と対峙するよりは何倍もマシか。

「しょうがないから手伝ってやるか」

愚痴をこぼしつつも、俺は壽幸のもとへ走り出す。

「それでどうする？ どう倒す」

「やっぱり目玉に突き刺すのが一番っばいな。俺が動きを止めるから、昭人、頼む」

やはりと言うべきか。

というか、倒すじゃなくて殺すのほうが合ってるな。

「殺さないでそのまま帰るといふ選択肢はないのか？」

「ない。それじゃあ俺の腹の虫が納まらねえ」

だったら止めを刺すのはお前の仕事じゃないか。なんて気がしたが、面倒なので口には出さない。

地に張る木を倒しながら前進する猪の鋭い目を見ながら提案してみる。

「俺は右目、お前は左目を潰す。それでどうだ」

我ながらいい提案だ。

いや、と口ごもる壽幸の返事を待つこともなく、俺は猪に向かって駆け出す。

駆けながら、この後の展開を想像する。

衝突寸前に跳び上がり、巨大な牙を掴みながら背に着地、そしてそれから躊躇なしで眼球を刺す。もちろん、刺す瞬間は目を瞑りながら。

よし、完璧な戦闘計画だ。

「よっと」

脳内リハーサルの通りに俺は軽く跳ね、そして猪の背中に乗る。猪の標的は完全に壽幸らしく、俺が背中に乗ったことは全く気に留めていない様子だ。

「壽幸。先に失礼するぞ」

右手で木の棒を高く掲げ、思いつきり突き刺す

ボン！

まえに猪の眼球が破裂した。

破裂というより、眼球そのものが激しく沸騰したような……。驚きと呆気にとられるという複雑な心境で猪から飛び降りた直後に、猪はその場で倒れこんだ。

「あー、どうなってんだ。これ」

「俺に訊かれても困るのだが」

生死を確かめるためか、壽幸は目の前の猪を木の棒で小突く。ピクリともしないことから、猪は死んでしまったらしい。

「おい」

唐突に横から聞き覚えのない声が聞こえた。

「森のなかを荒らしやがって。お前たちは何者だ？ 返答によっては斬る。いや、焼き殺されるほうがいいか？」

俺との歳の差が垣間見えない、緑色の髪をした青年だった。

腰には剣のようなものを携えており、鋭い、またしても緑色の目で俺たちを睨みつけている。

……今度こそ、洒落にならない気がする。

・第一章・002・壽幸の試み（後書き）

コメディ路線に走りすぎてる気がするのですが……。まあいつか。

「そつちこそ、なにもんだ？」

緑髪の青年の態度にイラツときたのだらう。壽幸は喧嘩腰に質問し返す。

おい、下手に挑発するな。

青年から、なにか危険な雰囲気を感じるのだ。

「私はこの村を守護するロア＝ガルーダ。貴様らのような愚者を滅する権利と使命を持つ者だ」

なにもって俺たちを愚者と判断したのだろうか。

そして疑念すべきは青年の「村」という言葉。見渡す限り森林が生い茂っているのだが。

それと名前。ロアとは……。外国人か？ たしかに、緑眼をした

日本人はいないと思うが。それにしても日本語が流暢だ。

なんかもう、色々とおかしい。

腰に携えてある剣が本物かは分らんが、和解するにこしたことはない。

「ええとだな。ここら辺を荒らしたのは謝る。だが、それもすべてこれに襲われたのが原因だ」

そう言いながら、地に転がっている巨大猪もどきを指差す。

これで納得してくれ。

しかし、ロアは怪訝そうに眉をしかめた。

「襲われた？ そんなことで騙されるとでも思ったか。愚かな盗賊

どもめ」

盗賊？ 誰が？

「ブアルゴに騎乗していたのを、私はこの目でしつかりと見ているのだ。もっとも、そのブアルゴも私が潰してやったがな」

巨大猪の名称はブアルゴというらしい。どんなマジックを使って殺したのだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。盛大に勘違いをしているロアという青年に、俺は必死に弁解を試みる。

「俺たちは盗賊でもなんでもない。この森に迷い込んでしまったところを、その……ええと、ブアルゴとやらに出くわして、襲われたんだ」

ロアはしばらく思索するようにこちらを眺めたあと、

「どうやらブアルゴに襲われたというのは本当らしいな」

なにを根拠に納得したのだろうか。

「だが、お前らの正体が不明なのは変わらない。おかしな格好をしやがって、旅芸人か？」

格好でいうなら、ロアのほうがおかしい。無地の布でできたつなぎは、とても服とは呼べないほどのものだった。素足だしさ。

「とにかく、お前らの素性を調べさせてもらう。おとなしくついて来い」

さて、どう返答するか。嫌だと言っても無理やり連行されそうな雰囲気だが、ここでついて行ったらなにをされるか分からない。とりあえず言葉を濁そうかと口を開きかけると、

「嫌だね。お断りだ」

壽幸がズボンのポケットに手を突っ込み、かっこつけはじめた。頼むから事態を混乱させるようなことはするなよ。

「……そうか。ならばどうすればおとなしくついて来る？」

わざとか無意識か、ロアの左手が剣の柄頭へ乗っていた。

壽幸は悪戯を思いついた小学生のような笑みを浮かべながら肩を竦める。

む、なにか嫌な予感がする。

「そつだなあ……、俺たちに勝ったらついてってやるよ！」

野球のピッチャーのように振りかぶると、鋭利に尖った木の棒をロアに向けて投擲した。

言わんこっちゃない。そして注目すべきは壽幸の「俺たち」という言葉。この野郎、なんの承諾もしてないのに俺を道連れにしようとした。

呆れるようにため息を漏らしたロアは、その場から動こうとしない。このままだと顔面に直撃だぞ。

「なるほど」

余裕の表情のまま、ロアは右手で剣の柄を掴む。

木の棒、というより槍に近いそれが直撃する寸前、ロアは脅威の速さで剣を抜刀した。

「分かりやすく助かる」

槍が見事なまでに縦に真っ二つになり、細い槍がさらに細くなっていた。

それから切られた木の残骸は地面に落下する直前に、爆発にも近い形で木っ端微塵に粉碎した。

俺は無然、重ねて啞然とする。んなアホな。

「私は『炎属』<sup>えんぞく</sup>の魔法を会得している。これを見ても尚、戦うというのなら相手になるが？」

「当たり前だ！ ぶっ殺してやる！」

ロアの態度が気に食わないのだろう。壽幸は憤然としていた。魔法という単語になんの疑問を持たないのは短絡的で馬鹿だからだろう。もちろん俺は疑問に持ち、そして確信する。これは夢なのだと。

「そうか」ロアは面倒くさそうに顔を顰めた。

「ならばさっさとかかって来い」

いままで怒りが倍増したのだろう。

「いわれなくても行ってやらあ！」

険相な面持ちで壽幸はロアに向かって駆け出した。

「ふっ！」

人間を超える速度で間合いを詰めると、右拳をロアの顔面目掛けて振り打つ。

ロアは上半身を後ろへ反らして回避。そのままの流れで剣による横薙ぎの攻撃を仕掛ける。

「うおっ」

どうやら身体能力はおろか、動体視力などの内的能力も向上しているらしい。

身を屈ませ紙一重に避けた壽幸はそれから地を蹴ってバックステップ。ロアとの間合いを広げた。

「あぶねえー」

ひらひらと、切れた壽幸の髪が落ちる。

汗を拭つように額に袖を擦りつけながら、壽幸は安堵の息を漏らす。どこか楽しげに見えるのは気のせいだろうか。

「どうした。まだ始まったばかりだぞ？」

ロアは眉を顰めて両手を広げ、余裕の態度で挑発をする。そのあと、俺のほうへと顔を向けると、

「お前は どうした？ やらないのか？」

二人がかりでも楽勝だぞ。という副音声を織り交ぜたような口調でそう言ってきた。

壽幸ならばいざ知らず、俺は短気ではないし争いごとも好まない。本当ならさっさと帰って弁当を頬張りたいたのだが……なぜだろう、いまのはイラっときた。

「いや、そろそろ交せてもらおうでしょう」

気づいたら、俺はそんなことを言って走り出していた。なに、どうせ夢だ。最終的にはご都合主義なハッピーエンドで終わるはずだ。

しかしまあ、あの切れ味鋭い剣を相手にするのだ。間合いを詰めすぎては危険すぎる。ここは、牽制しながら隙を衝くが最適だろう。形振り構わず突っ込む野郎がいるため、そいつに隙を作らせればいい。

「はああああ！」

案の定、形振り構わず突撃を開始する壽幸。

元々俺より距離の近かった壽幸が先にロアへと急接近する。

ロアの攻撃範囲に入った瞬間、壽幸は右拳による回し打ち。

またしても体を反らして軽々しく避けるロアに反撃させまいと拳打を重ねる。だが、そのすべてが当たらない。避けに徹しているロアの表情は悠然たるものだった。

たしかに、大振りな壽幸の攻撃なら俺でも回避できる自信がある。

「ふん、単調な攻撃だな」

呆れるように鼻から息を漏らしたあとにロアはわずかに後方へ飛び退き、壽幸の間合いから脱する。それからすぐさま剣を構えると、前へ踏み込むと同時に突きを放つ。

俺はそこを見逃さなかった。

「はっ！」

現実を超越するほど昇華した跳躍力で一気にロアへと飛びつくと、俺は持つている木の棒でロアの右手に打ち込む。手応えあり、だ。

油断していたためか、反応しきれずにロアは持つている剣を放してしまう。その隙に壽幸は腹部目掛け前蹴りをかまし、俺は落下する剣を捉えると生い茂る木々のなかへと放り投げた。

剣は弧を描き、ロアは線を描きながら吹っ飛んだ。

「くっ……！」

空中で体制を整えると、地面に手を着き後方転回しながら着地した。

それを見て、壽幸は悪戯に成功した小学生のように喜々しながらガッツポーズをした。

「はっ！ 油断大敵ってやつだな！ さっさと俺の力に屈しろ！  
そして謝れ！」

少しは俺を賞賛する言葉があってもいい気がするのだが。

「ふん。弱いやつほどよく吠える。これぐらいで調子に乗るとは稚拙な輩だ」

立ち上がりながら、ロアはそっぽを向いて言った。拗ねを含んだ口調で、それがまだ子供っぽいところ強調していた。

「モロに蹴りを喰らつといてよくもまあ。ああ、弱いやつほど負け惜しみをほざきたくなるもんな」

「だ、黙れ！」

みるみるうちに顔を紅色させながら叫ぶロアは実に滑稽だった。

「……だが、油断していたのはたしかだ。しかしもう、同じ手は喰らわんぞ。フォル族としての能力、見せてやる」

即座に落ち着きを取り戻したロアは、目を瞑ると手を上へ掲げた。

「神聖なる木々たちよ。我が問いに応え、一時ひんがせの力を……」

前もって言うておくが、風は吹いていない。全くの無風だ。

だが、ロアの言動に応えるように、周囲の木々が激しく揺らぎ始めただのだ。

俺の背に悪寒が駆け巡る。

「なあ」壽幸は俺の耳元で囁く。

「実は俺、皆勤賞を狙ってるんだ」

「はっ？ こんなときになんだ」

「いや、今ごろ昼休みが終わって授業が始まってんだろ。サボるわけにはいかねえんだ」

なるほど。要するにあれか。蹴りもかまして気分も晴れたし、この現象が恐ろしいから早く逃げ帰りたいと。

「実は俺も狙ってるんだ。皆勤賞」

数日前に休んだばかりだが。

「ただ」

走り回ってたから扉の場所を見失った、と言おうとして硬直した。振り払われるように舞い散る大量の木の葉が、地に着くことなく空中で浮遊しているからだ。

それに気がついた壽幸も「ザ・イリュージョン？」と口をあんぐりとさせている。

俺たちの周りを取り囲むように密集した葉は、もはや元の光景を隠すほどの密度に達していた。一体なにが起こるんだ。

ロアはただ呆然と怪奇な現象を眺めている俺と壽幸に対し意味深な笑みを浮かべた。

「状況の判断ができていないようだな」

できるわけがないだろう。こんな超自然。

「……なにをする気だ？」

答えてくれるとは思わなかったが、逃げられまいと判断したのだろう。ロアはあっさりと思惑を告白した。

「なに、大したことはないさ。これらすべての葉たちがお前たちに降り注がれるだけだ」

……この量が一気にか？ どうなっちまうんだ。

「くっ、ぶはははは！ なにかと思えばそれだけか！ 本当に大したことないんだな」

爆笑しながら拍手する壽幸。はたしてそうなのだろうか。しかしまあ、どんな危険度だろうが逃げられそうにないが。

「そう。どんなものは喰らえば分かるさ」

ロアの笑みがさらに深くなる。  
反射的に俺は身構える。

「くるぞ」

注意を促すように壽幸に呟いく。

「ああ」

俺はロアの動きに注目する。

一泊の間の後、ロアは掲げている右手を勢いよく降ろした。

「っ！」

壁と比喻してもよいほどの木の葉が、ものすごい速度で一気に襲い掛かってきた。

飛び上がるようにして回避を試みるが、いかんせん攻撃範囲が広すぎる。

「うわああああ！」

成す術もなく、俺は苦し紛れに持っている木棒で葉を振り払うという行動に走った。だが、全くの無意味だった。もはや木の葉ではなく木の刃と表現したほうが適切である無数のそれは、目で追うことすら困難な速度で猛威を振るい、俺の体に傷を刻み込む。

そんな時がどれほど続いただろうか。制服が制服と判断できないほどに斬り込まれたところで襲来が止んだ。

「がっ……、はっ」

俺はその場で崩れるように膝をついた。

悔っていた。たかが木の葉による猛攻がこれほどのものとは。というか、体中に激痛が走っているんだ。夢だったら覚めてもおかしくねえだろこの野郎。

くそ、なんで俺がこんな目に遭わねばならんのだ。

すべて原因は壽幸にあると思うのだがどうだろう。少々押し付けがましいか。だが、元々ロアに喧嘩を売ったのはあの命知らずのよた者だ。やっぱり、壽幸が主因だな。

倒れかける体を傷だらけの腕でなんとか支えながら、俺はさつき爆笑していた野郎へと意識を向ける。

そこで気づく。壽幸のいる方角から、なにか物が焦げたような臭いが鼻につく。それから、うっすらとだが、白い煙が漂ってきてい

るのにも気がつく。

一体なにが起こったんだ。

重い頭を精一杯に上げて、まずは前方にいるロアを窺う。

ロアは一步、二歩と後ずさり、目を大きく見開いて睜目していた。その吃驚の視線の先は、壽幸のいる方向へと向いていた。

重い頭を今度は精一杯に回して、壽幸の状態を確認する。

「なっ……!!」

とんでもないことになっていた。

焼け焦げる臭いとともに、壽幸のいる場所に白煙が発生していた。煙に隠れ、直接、壽幸の姿は目視できないが、白煙のなかにある黒い人影がおそらく壽幸のものだろう。

ここで、俺は先刻のロアの言葉を思い出す。出会い頭に放った言葉だ。

「森のなかを荒らしやがって。お前たちは何者だ？ 返答によっては斬る。いや、焼き殺されるほうがいいか？」

……まさか、本当に焼き殺されたんじゃないだろうな。

しかし、いまのロア表情から察するに、ロア自身にも想定外なこと起こったのではないかと思われる。

とにかく、壽幸は生きているのだろうか。煙が晴れたら真っ黒い肉塊が転がっているなんて嫌だからな。

しかし、そんな俺の懸念を晴らすように、白煙のなかから、

「ぶわー！ どうなってんだこれ！」

という、うざいほど元気な声が漏れてきた。どうやら無事らしい。ザクザクと枯れ葉を踏むような音とともに、壽幸は煙から脱して

きた。

「見るよ昭人！ 俺、とんでもねえことになってる」

不思議なこととムカつくことに、壽幸にはかすり傷一つ刻まれていなかった。

その代わりに、俺に近寄ってくるその身体本体から、薄く白煙が溢れ出ていた。

「ちゃんと見ろって！」

「ああ、見てるっての。というか、その前に俺の身体を労わったらどうだ」

皮膚から煙を放出させながら「そんなのはどうでもいい」と吐き捨ててくる。こ、この野郎。

壽幸は俺の眼前で屈むと、訊いてもないのに自分に起こったことを話し出した。

「木の葉が俺に触れた瞬間、それが一瞬のうちに燃え上がって炭と化すんだよ！ すごくねえ？ おかげでなんともなかったぜ。はは！」

憎たらしいほどうるせえ。なんで俺にはなにも起こらなかったんだよチクシヨー。普通は余裕ぶっこいて調子に乗ってる壽幸が俺と同じ状態になるべきだろうが。

「どうだ！ てめえのおかしな攻撃も俺には全くきかなかったぜ！」

壽幸は威勢よくロアに指差した。

ほら、さらに調子に乗り始めたじゃないか。

「なんならもう一回やってみるか？ ええ？」

勘弁してくれ。お前がよくても俺が死ぬ。

「ちっ」

ロアは悔しそうに唇を噛んだ。

「まさか『燃烧魔法』を会得しているとは……。戦いに慣れていない様子から、魔法は使用できないと踏んでいたのだがな。なおさらお前の正体を確かめなければならなくなったな」

「お前たち」から「お前」に切り替わっているところに、俺は内心で傷ついた。どうやら『燃烧魔法』とやらが使えずに傷だらけになった俺は、もはや眼中にないらしい。哀れ俺。

畜生、もう拗ね男すねおになってやる。

「俺はもうダメだ。あとはもう、すべてお前に任せる。お前がなんとかしろ」

「おう！ 任されたぜ！ なんか知らねえけど、すげえ力が湧いてきてるんだ。これなら勝てるぜ」

多少皮肉らしいものを込めたつもりだったが、いまの壽幸には無意味らしい。惨め俺。

まあいい、どの道この身体じゃ動けないしな。じっくり傍観させてもらおうとするか。

「よっしゃあ！ かかって来い！」

壽幸の興奮する心情に比例するように、体から溢れる白煙が増しているように感じるのは気のせいだろうか。まあ、そんなことを知ったところで意味はないのだが。

とにかく、いまはロアを倒し、学校に戻るのが先決だ。魔法どころについても考えるのは止そう。現実には順守した世間体の狭い脳みそで思考したところで、答えが見出せるとは思えない。

ちなみに、いまのこの現状を夢だと思うのも破棄している。だって、普通に体中が痛いんだもの。頬を抓るよりも何百倍もな。

- 第一章 - 004: 壽幸覚醒、俺重傷(後書き)

なんか予定よりも戦闘の件がめっちゃめっちゃ長くなってます。

次の話で終わりにできればよいのですがね。

まだこの部分は物語の本筋に入ってますらないので。

地面を突き破るように、ロアの周りに、地中から鋭い触手のような物体が数本出現してきた。

「少々甘く見すぎたか。今度は葉ではなく、根のほうで戦ってやる  
う」

どうやら、生い茂る木々の根らしい。そのわりには、とてつもなく太くて長い。なんとまあ、先ほどの木の葉と類似した速度で攻め込まれたらひとたまりもないぞ。体に綺麗な穴が開くかも知れん。

ロアは快楽を交えた笑みを浮かべる。あれか、強いやつと戦えて感極まるってか。

「かかってこ」

壽幸が叫ぼうとした刹那、槍のような根が勢いよく襲い掛かってきた。

「うおっ」

ドドドドドドドッ！

まさに、この擬音そのままの音が耳を劈く。

破碎してゆく地面の上で、壽幸は華麗に避け続ける。その動きは、『燃焼魔法』とやらが覚醒するまえと比にならないほどに磨きがかかったものだった。

「よっどー！」

目にも止まらぬ猛撃にタイミングを合わせて、壽幸は根の上に乗った。それから滑るようにしてロアに急接近していく。

滑っている最中、足と根が触れている部分から激しい白煙とともに炎が出現していた。摩擦だけではあり得そうにないため、これが魔法の力なのだろう。マツチを壽幸に擦り付けたら火がつくかもしれないな。

ボンツ、と壽幸の足元の炎が弾けると同時に跳び上がり、その推進力で一気にロアとの距離を縮める。

「沸き上がる力を放出するように」

「ちっ」

間もなく接近してきた壽幸に困惑する表情を見せながら、ロアは木の根で盾を形成し出す。

「出るおおお！」

眼前まで近づいたところで、壽幸は手のひらから火炎放射を浴びせた。

「昭人見る！ マジで出たぞ！」

あつそ、だからなんだ。今さら驚きはしないさ。壽幸だけが魔法を使えるというのが腸が煮えくり返りそうなくらい気に入わんが。

豪快すぎる炎で包み込まれており、ロアの安否は確認できない。ちよつとやり過ぎじゃないか？ 火事になりかねんぞ。

数秒後、炎のなかからロアが転がるように跳び出して来た。服のところどころが焦げており、頬は煤で黒くなっていた。

「な、なんという威力だ……」

膝をつきながら、ロアは啞然としているようだった。

「ふふん」

壽幸は得意げに顔を綻ばせてから、猛火に触れた。

草木を燃やす炎は、たちまち壽幸の手へと吸収されていき、黒く焦げた一帯だけが残った。

満足げな壽幸からはもう怒りは読み取れず、それに伴い体から放出する白煙も消えていった。

ニヤリ。ロアは鋭い笑みを浮かべた。

「どうやら、お前は『燃烧魔法』を使えるのではなく、使えてしまったと言ったほうが正しいようだな」

「なに？ うおっ」

訝しげに眉を上げる壽幸にロアは向かっていき、拳打を加え出した。

「はっ、懲りないやつだなー」

壽幸は余裕そうに身構え避けようとするが、明らかに動きが鈍くなっていた。

数発捌いたところで、ロアの一発が顔面を捉えた。

「『燃烧魔法』の弱点は『燃えないもの』と『解いた直後』だ」

「あ？」

地面に倒れこんだあとに、壽幸はロアとの間合いをとった。

「『燃えるもの』から魔力を吸い取り、己の身体能力を底上げする『燃烧魔法』。さきほどのお前の動きが己自身の能力だと思ったら大間違いだ。心得ておけ」

「なにを偉そうに。なんならもう一回喰らってみるか？」

立ち上がりながら、壽幸は眉を吊り上げる。

「はっ！」

一気に魔力を開放。それからロアに手を向け、

「……あり？」

壽幸は不思議そうに首を傾げた。

炎が放出されたにはされたが、さきほどの爆炎とは比べるもの馬鹿らしい程度の炎しか出なかった。ふむ、ライター代わりにはもってこいだな。

「やはりな」ロアは肩を竦めた。

「怒りに我を任せて無駄に魔力を使用していたが、冷めるとこの有り様だ。哀れな」

やはり、魔法が使用できたのは僥幸か。

「うるせえ」

何度同じ動きを繰り返しても同じことだった。壽幸の手が大きな火を噴くことはない

「いい加減、この戦いにも飽きてきた。そろそろ終わりにしようではないか」

壽幸の真下から数本の細い木の根が出現し、動きを封じるように足に絡みだした。マズイ。

俺はすぐさま立ち上がり、壽幸の護衛を試みる。だが。 。  
くそ。動け俺の足！ こんな状況で友人を見捨てるほど性根は腐っちゃいない。内心で自身に悪態をつく。

壽幸の元へは、傷だらけの俺の体では到底間に合わないのだ。

「なに、殺しはしないさ。お前たちには聞き出さなくてはならないことが多くあるからな」

ロアは壽幸の眼前まで移動すると、手を木々が生い茂る空へと掲げた。

「ちくしょう。ここまでか」

壽幸は悔しそくに顔を歪ませ、唇を噛み締める。

そのとき。

遠くのほうで、なにやら鐘が鳴るような音が聞こえてきた。そのなかに、何者かの男の声も混じっている。

「盗賊だー！ みんなすぐに避難するんだー！」

図太いその声色は、歳相応の恰幅のいいオッサンをイメージさせる。

ピク、といち早く反応し顔を上げたロアは俺と壽幸を数回、交互に見てから、

「ちっ……！！ こいつらは囷？ それとも全くの無関係者か……？」

なんの接点も謂れも関与もない無関係者です。

そんなようなことを言おうとしたときには、ロアはその場から立ち去り、音のするほうへと駆け出していった。

「た、助かったあー」

思いがけない幸運に、安堵するようにため息を漏らした壽幸は地べたに寝転がった。

俺はゆっくりとその隣まで移動し、地に尻を着いた。

「なあ、俺等が襲われた理由ってなんだったんだ？」

そんなことを訊かれても、絶対的な回答は持ち合わせてはいないが。

多分、と俺は前置きしてから、

「俺たちのことを盗賊だと勘違いしてたんじゃないか。この近くに村かなにかがあるみたいだしな」

「じゃあ、またあいつと出くわしたら、こんなことになるのか」

「そつだろつな」

改めて出くわすことがあるのだから、と思いつつ俺は応える。

「だよな……。そんでき、俺さ、いいこと思いついたんだけど」

「いいこと？」

「おう」「足に絡み付いてる根を引きちぎりながら、壽幸は高揚した声を上げた。

「俺たちが盗賊どもを潰せば、疑いが晴れるんじゃないか」

「はあ？」と俺。

「なぜそんなことをせねばならんのだ」

「だってよう」「と壽幸。

「あのロアってやつと話したいことがあるんだよ」

「例えばなんだ？」

「いや、燃烧魔法だっけ？　のこととかよ。あいつの木を操る能力ちからのこととか色々だ」

俺は無然とした態度で唇を尖らせる。

あーあ。戦いに目覚めちゃったってやつか？　まさかそんなものに興味を持つとはな。

こういった感じにふてくされてると、壽幸は俺の表情を覗き込む

ようにして、

「なんだ。自分が魔法使えなっかたんで拗ねてんのか」

うるせえ。

「だったらそれもロアに訊けばいいじゃねえか。俺が使えてお前が使えないわけないだろ」

たしかに、そうかもしれんが。

「いま、この状況が夢だとは思わんのか？」

俺の質問に壽幸は即答した。

「思わん。夢だったらとっくに覚めてんだろ」

ふむ。俺と同じ考えだ。

「都合がいいことに、このヘンテコな場所へは『鍵』があればいつでも行けるからな。遊び場所には持ってこいじゃねえか」

うーむ。たしかに一理あるが。

どう返答しようか、と悩みだしたところで俺は思い出したように考えを放棄する。

だがまあ、そんなことより、と俺はガラガラに空いた胃の上に乗せる。

「とりあえず帰ろうぜ。腹が減って仕方がない」

「おう。そうするか」

日常の風景に戻ってから、じっくり考えればいいさ。

二人揃って立ち上がると、俺たちは戦闘で悲惨な地帯と化しているこの場所をあとにするのだった。

ちなみに余談だが、学校へと帰る扉を探すのに相当な時間が掛かったのは言うまでもない。

「おい。なにポーっとしてんだよ」

昼休み屋上にて。

頭のなかでロアとの戦闘を思い返していると、壽幸が眼前で箸を  
持った手を振ってきた。

せつかくいい感じの展開まで回想していたのに、邪魔をするな。  
とはいっても、その後の展開はただ『扉』の向こうに広がる世界  
が俺たちの遊び場と化して、定期的に遊びに行っているということ  
ぐらいだ。

ロアと戦闘を繰り返した付近には集落とも呼べる村が存在してい  
た。

たまたま異世界に来たときにその村が盗賊に襲われており、俺た  
ちが加勢したことでロアからの疑いも晴れた。つまり、現在ではす  
っかりロアとも親しみを持つ関係になり、村に行けば歓迎してくれ  
るという状態だ。

異世界についてなにも知らない俺たちにロアは疑念を抱いていた  
が、別の世界から来たと言って『扉』を見せたら一応納得してくれ  
た。本心はどうか知らないが。

そのとき分かったのだが、どうやら『扉』は一度『鍵』に触れな  
ければ可視することができないらしい。

他にも、この一ヶ月で知りえたことは数多くある。

例えば、傷だらけの状態で元の世界に戻ると傷がなくなっていた  
りする。もつとも、また異世界にすれば傷が復活しているのだが。  
つまり、その世界で傷を負ったら、その世界でのみ適用し、もう一  
つの世界には持ち越せないということだ。

あとは能力のことだ。俺たちは異世界にしていると身体能力が向上し  
たり魔法が使えたりと便利な体になるのだが、元の世界に帰るとそ

れらがなくなり、通常通りのスーパー凡人に回帰してしまうのだ。他にもあつたりするのだが、それは順をもつて説明しよう。

ちなみに、上記の言葉は一週間ほど前から異世界を遊び場にするようになった俺の腐れ縁とも呼べる級友、鵜瀬颯人うせはやくと詩丘琴音しおかことねに語った内容である。

「しつかりしようぜ。あと三日で憎き盗賊たちを壊滅させに行くんだからよ」

卵焼きに箸をぶつ刺しながら壽幸は言った。実に楽しそうな顔である。

そう。俺たちは盗賊団のアジトに潜入して滅ぼそうと計画しているのである。元々は、ロアと知り合いたいという考えからきていた案だったのだが、その目的はすでに果たされている。ではなぜか。それは単純なことで、親しみを持った村にたびたび襲撃してくる盗賊たちが許せないという短絡的な理由からだ。ちなみに提案したのは壽幸で、決定したのも壽幸である。

「それにしても勝手な話よね。ウチらはまだ協力してあげるって言ってないのに」

「しょうがないよ琴音。自分勝手に無責任で馬鹿なところが壽幸の長所なんだから。それを除いたら甲斐性なしのアホってところしか残らないよ」

今日の昼食は颯人も琴音も同席している。

「はあ？ この計画を言ったときは嬉しそうにはしゃいでたじゃねえか」

はしゃいでたのは主にお前だが。

ああ、そういえば琴音も喜んでたな。喧嘩っ早く戦いが大好きな空手部の猛者だからな。その点は壽幸と似ている。

「じゃあ僕は抜けていいかな。嬉しいもなにも、面倒くさいの一言に尽きるんだけど」

「ダメだ」

それには俺が反応する。颯人よ、面倒に思ってるのお前だけじゃないんだ。俺は乗り気じゃない体に鞭を打って頑張ってるんだ。

「お前も道連れだ。来い」

はあ、とあからさまに盛大なため息をつく、颯人は鳥の唐揚げを口に放り込んだ。

「……しょうがないなあ。分かったよ」

一人称が僕で普段おっとりとしている颯人。だが人一倍毒舌で、俺たちの中ではダントツに性格が歪んでいる。

「しかたないからウチも参加してあげる」

唇を尖らせてそっぽを向く琴音。お前は、うん、行きたくてしょうがないんだな。

「よし。そうと決まれば放課後ここに集合な。闘争に向けての修行だ！」

壽幸は立ち上がり、口から盛大に飯粒を吹き出しながら言った。

「ウチ部活だから無理ー」

「僕は家帰って勉強するから無理ー」

おい。琴音はともかく、颯人はおかしいだろ。

「ちなみに嘘じゃないからね。僕はこう見えて計画的な人間だから」

毎回テストを赤点墜落ギリギリ低空飛行で保ってる野郎の言う台詞じゃないな。

ということ、例によって俺と壽幸に無理にでも来るように促され渋々納得させた。

こいつ。異世界という未知なる非現実を目の当たりにしてもこの調子なのがすごい。

そういえば初めて異世界について話したときも、

「だからなんなの？ 興味ないんだけど」

の一言だったからな。そのあと壽幸が無理やり引っ張って『扉』の奥を覗かせたんだっただか。さすがに、魔法には感嘆しているようだったが。

「琴音はいいや。部活頑張れよ」

「ちょっと壽幸。なにそのどうでもよさそうな言い方」

「いやー別にー。魔法の使えないやつがいても戦力外になるだけだし、来ても来なくても変わんねえかななんて思ったただけだ」

完全な嫌味である。

「琴音は乱暴に箸を振り回して、

「それは聞き捨てならないわ。たしかに魔法は使えないけど……ウチには体術があるの」

そう、壽幸の言う通り琴音はなぜか魔法が使えないのだ。まあ、部活でロアによる魔法指導に参加していないのもあると思うが。

しかし、それを十分補えるほどの戦闘力を誇っている。異世界では喧嘩を振らないほうがいい。殺されるからな。現に壽幸は半殺しにされた経験があり、そのため琴音には来てほしくないのだろう。身体的にはなんとか無事だが、プライドはボロ雑巾にされたあげくに焼却炉で盛大に燃やされてトイレに流されたようなもんだからな。特に人並み以上に高い無駄なプライドを持つ壽幸ならば屈辱の極みに達するだろうよ。

「鮮烈にボコボコにされた壽幸が言ったらダメでしょ。大人気ないし女々しいよ」

わざとらしく吹きだした颯人に眉を吊り上げる壽幸だが、なにも言い返せないように押し黙っている。

「あ、女々しいって意味分かる？ 柔弱で女みたいってことだからね。うん。女装したらごつくて敵つくてきつとかかわいいんじゃないかな。思い切って性転換してみたらどうだい」

「うるせえよ！ 馬鹿にすんな！ 俺のどこが女々しいってんだ！」

苦し紛れの壽幸の反抗。小学生のようだ。

そんなことに顔色一つ変えずに、

「やっぱり女々しいって言われるのは嫌みたいだね。だったら、なおさら性転換をオススメするよ。女に変わった壽幸を見たら、全員が『男らしい女だな』って褒めてくれるから」

今日の颯人の舌も絶好調のようだった。

まあ、たしかに壽幸みたいな恰幅のいい女を見たら「男らしい」という言葉が出ると思うが、意味合いが違うだろうよ。褒め言葉でもないしさ。

「あーもう！ とにかく、放課後になっいたらここに集合！ いいな！」

反論するのを諦めたらしい。懸命な判断だな。口喧嘩で颯人に勝つには三世紀ほど早すぎる。

壽幸が叫んだ直後に、昼休み終了のチャイムが学校内に鳴り響いた。

ちなみに、別に壽幸と颯人は仲が悪いわけではないからな。颯人が壽幸をおもちやにしているだけだ。

- 第一章 - 007: 昼休み (後書き)

基本的に自分の書く登場人物は性格が歪んでいます。笑

放課後。ロアの護衛する村、レスト村にて。

指向性を持つ心地よい強風と共に、壽幸の体は宙に待った。その体からは、『燃燒魔法』により白煙が放出されている。

「うーん。思ったより飛ばないなあ」

悲鳴を上げながら、轟く木々に落下する壽幸を傍観しつつ、風を発生させた張本人である颯人が首を傾げた。

「ロアー。やっぱり僕は戦いに向いてないと思うんだけど」

どうせ盗賊団のアジトに乗り込むのが面倒なんだろう。

「む。颯人が向いてないのだったら、他の連中も向いてないことになるぞ」

それは、俺らのなかで一番強いと示唆しての言葉だろう。

「それにしても」

ギヤーギヤー騒ぐ壽幸を完全に無視しながら、颯人は村のなかを見渡す。

「村とは呼びにくいぐらい貧相なところだよな」

村人の目を気にせず放つその言葉に、

「実際に、ここは地図に載っていないからな」

ロアの何気ない一言に俺は疑問を持つ。

「どういうことだ。ここは村じゃないのか」

「集落と呼んだほうがいいかもしれん。ここは国に認められずに、我々が勝手に作り上げた村だからな」

なるほど。たしかに、村と呼ぶにはあまりにも寂しすぎる。

「道理で、盗賊どうこうの話になっても国がなにもしてこんのか」

「そういうことだ。国としては、非公認のレスト村が潰れてくれたほうが都合がいいのだろう」

颯人は周りにいる村人たちを見ながら、

「国にとつたら、ロアみたいなフォル族は邪魔なの？　ここはフォル族の集まりなんでしょ」

村人たちも、ロアと同じように緑目と緑髪を持っている。そのよ  
うな者たちはフォル族と呼称されるらしい。

「いや」ロアは口ごもらせる。

「国は、我々フォル族を人間とは別の生き物として見ているのだ」

「別の生き物？」と俺。

「ああ。兵士として国に属している者もいるが、基本的に力なきフォル族は野生の生物と同じような扱いを受けている。我々が作り上げた村と呼んでいることも、国にしたら巢と同然だろう」

予想外の暗く深刻な返答に俺は俯く。

「なぜ国はそこまでフォル族を嫌っているんだ」

「それは、我々の能力に問題があるのだろう」

「能力ってなんだ？」

体のあちこちに泥を付けながら、壽幸が割り込んできた。

「お前たちも見ただろう」ロアは林立する木々を指差す。

「生前、我々フォル族はこのような森のなかで一生を終えていた。そのためか、我々には植物と意思疎通のできる能力が備わっているのだ」

「意思疎通？ 会話ができるということか？」

その通りだ、とロアは俺に返答する。

「じゃあ、俺と壽幸が初めてお前と邂逅したときに俺たちがヴァルゴに襲われていたことを知ったのは……」

「木々たちが教えてくれた」

「すげーな。じゃあ木を操るのも能力の一つなのか」

さきほどのネガティブな話を忘れたかのように壽幸が目を輝かせ始めた。

木を操る。木の葉やら木の根で（主に）俺と（無傷だった）壽幸を苦しめたあれか。

「いや。半分正解で半分不正解だ。あれは多くの魔力を有するものでなければできない」

ロアは剣を肩に乗せた。

「どゆこと？　もしかして、俺でもできんのか？」

壽幸の目の輝き度が三割ほど増した。習得して颯人と琴音を倒そうなどと目論んでいるのだろう。

「いや、フォル族にしかできない」

「なんで？」

「植物の生命力を魔力で繋ぎ合わせることで始めて操ることができ。そのためには、植物から生命力を提供してもらわなければならないのだ」

「強制的に生命力とやらを使用することはできないのか？」

ロアは首を振る。

「生命力は魔力を超える力を持つ絶対的なものだ。いかなる者でも

籠絡することはできない」

「ねえ」と颯人は壽幸を一瞥した。

「壽幸のせいで話が盛大にずれたんだけど。少し静かにしてくれないかな」

「な、なんだよ。というか修行してたんだろ、俺たちやぶわっ！」

颯人は壽幸に向けて風を発生させた。黙れ、と目で言っているよ  
うだった。

「この村には、ロア以外に戦える人は？」

「皆無だ。力自慢の男はいるが魔法が使えなくては無力に等しい。  
だから感謝しているのだ。やっと、私たちを苦しめる盗賊たちを滅  
することができるのだからな」

嬉しそつに微笑するロアに戦慄を憶えつつも、今度は俺が疑問を  
ぶつける。

「そんな村が、今までよく耐えてこれたな。言っちゃ悪いが、いつ  
潰されてもおかしくないんだろ」

「それはあれでしょ」と颯人が村の中を見渡す。

「あくまで盗賊たちの目的は資財とか食料の強奪だからね。潰すこ  
とはしないでしょ」

「ああ。だが、ここ最近になって、無視できない問題が発生した」

ロアは唇を噛んで目を吊り上げた。

「この村の女が次々と拉致されているのだ」

その言葉が俺の胸を突き刺し、感情を昂らせた。

もう面倒などと言ってる場合じゃないな。一刻も早く盗賊どもを潰さねば。

自分でも珍しいと思うほどに感情的になっていると、

「くそ。許せねえ。絶対にぶっ潰してやる」

「僕は手助けする義理も人情も持ち合わせてるつもりはないけど、さすがにそれを見過ごすと人間性を疑われるからね」

壽幸はもちろん、颯人もその気のようにだった。あいかわらずネジ曲がった言い分だが、颯人はやるときはやりすぎる男だ。

何だかんだこの村には世話になっているからな。ロアいわく、盗賊たちで魔法を使えるものは皆無らしいし、身体能力の変異に魔法が使えるいま、怖いものはない勢いだ。

「あつ、そだ、もう時間っばいな」

壽幸は思い出したように携帯電話を取り出そうとポケットに手を突っ込む。

この世界へと続く扉は、なぜだか学校にある。あまり遅くまで滞在しているわけにもいかないのだ。

「ぬあー!!」

「あつ」

携帯を手に壽幸は驚愕したように叫び、颯人は短く声を上げた。無残にも、携帯は半壊状態だった。スライド式のそれは、液晶は完全に割れ、歪に陥没、湾曲していた。颯人に風で飛ばされまくってたからな。素直に頷ける当然の結果だ。

「ははっ。今日はいつもより風の強さをハードにしてみたからね」

「ははっ、じゃねーだろ！ どうしてくれんだよー！」

「どうしてくれるんだよって、そもそも持ってくるほうが悪いと思っけどね」

たしかに一理ある。修行という名目でこの世界にやってきているのだ、持ってくるほうも持ってくるほうだ。現に俺と颯人は俺たちの世界に置いてっっている。どうせ圏外だし。

「まあ、そんなことより、そろそろ帰ったほうがいいかもね」

腕時計を眺めながら颯人は壽幸との会話を破棄し、そう言った。辺りはもう日没で赤く染まっており、それは、俺たちの世界ももう夜に向かおうと日が沈み始めている時間であることを意味する。

「じゃあそっいう訳だから、そろそろ帰るわ」

「ああ。分かった。気をつけて帰れよ」

俺はコアと周辺にいる村人たちに手を振って『扉』へと足向け  
た。

「うーん」

村を出て林立する木々のなかを歩いてみると、隣で騒いでいる壽幸を傍らに、颯人はなにやら思いつめたように唸っていた。

「どうした。具合でも悪いのか」

「いや、そういうわけではないんだけどさ」

パキパキと木の枝を踏んづける音ともに、颯人は首をかしげた。

「おかしいと思わない？」

なにが？

「ロアの言動。なんかおかしいんだよね」

なんで？

「ロアに会ってまだ一週間ぐらいしか経ってないけどさ、僕たちの素性についてなんの疑問も出してこないんだよ？ ある程度のことば昭人が説明したかもしれないけど、別の世界からやってきたなんて言ったら、もっと詮索してくると思うんだ」

たしかに、それはそうかもしれないが……。

「盗賊ではないと分かってても、謎の多い僕たちに、ここまで親切に世話してくれるのはちょっと考えにくいんだよね」

「それはあれじゃないか。謎が多くて、盗賊を壊滅させるのに加担してくれるからじゃないのか？ 村の女が連れ去れてるんだ。もはや形振り構っている場合じゃないんだらうよ」

「そうかもしれないけどさ……」

しばらく歩いていると、大きな扉が視界に入ってきた。

「いずれにしろ、ロアやフォル族、この世界のことも知つといたほうがいいかもしれんな」

俺はポケットから『鍵』を取り出し、ノブ下の鍵穴に挿し込んだ。

- 第一章 - 008：颯人の疑念（後書き）

久々の更新。

というかいま、猛烈に後悔しています。

前話の昼休みの回。なんか話が突拍子すぎたし省略しすぎました。

r z

拳句に今回、もう既に二話前まで互いに知りえていなかったロアとの親しみが生まれているという……。

ロアとの関係をここまで持つてくる件を書くのが面倒だったんです

o r z

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9948i/>

---

僕の私の異世界邂逅記

2010年10月17日17時55分発行